明庵栄西像・絶海中津賛
—守り伝える技とこころ日本の美—

棚橋 映水

吉備国際大学文化財総合研究センターにて、平成 22 年 9 月 21 日ならびに平成 23 年 1 月 18 日の両日、大学院ＧＰ特別教育プロジェクトにおいて、「明庵栄西像・絶海中津賛」の科学分析調査が実施され文化財情報学研究第 8 号にその分析結果の報告がなされた。その後における明庵栄西像・絶海中津賛に伴う修理の遂行状況について述べる。

１．はじめに

岡山県出身の僧明庵栄西（えいさい・ようさいともよむ　1141－1215）の画像は、あいにく栄西在世中のものが現在のところ伝世せず、本図が現存最古となる。上部には、仏光国師（無学祖元）の賛を引用して相国寺の絶海中津（1336－1405）が着賛している。絶海中津は応安元年（1368）入明、1378 年帰国。義堂周信と並び五山文学の双璧にあげられる禅僧で、詩文集『蕉堅稿』などの著作がある。賛に「鹿苑比丘中津」とあることから、中津が鹿苑院に住した 1383 年から 1384 年ころ、または鹿苑院塔主を勤めた晩年 1398 年－1404 年の着賛と見られる。

賛文は以下の通り

法中之英　僧中之傑／一錫浮滄溟　南詢還／北謁　帰来三処開山／法雨雷施電掣　形留／千載花上之春　道播／両国水中之月　建仁開山千光禅師頂相／謹書／仏光国師所讃之語／以塞仲首座之請／鹿苑比丘中津九拝書（印）

顔の表情から、衣、手先までしっかりとした描線で丁寧に描かれている。元禄 15 年（1702）、中国・日本の様々の著作をもとに僧師蛮が編纂した『本朝高僧伝』中の「京兆東山建仁寺沙門栄西伝」に、栄西 18 歳の時、身体の小さいことを侮られたことから百日間、求聞持法を修して四寸余り身長を伸ばしたという伝説が記されている。栄西の画像や彫像において側頭部から頭頂部が大きく表現される独特の形状はこのような伝承から生まれているかもしれない。

※建仁寺 高台寺・圓徳院・備中足守藩主木下家の名宝とともに 岡山県立美術館図録引用/ p 149, 166,

この作品が現在に至るまでに何度かの修理が行われていることは目視するだけで確認できる。しかし経年の劣化や損傷が著しく巻折れが多数に及んでいる状態であった。本作品に関する修理作業については、調査にかかった期間　2 年間（2010・11）、修理にかかった期間　2 年間（2012・13）、調査と修理であわせて 4 年の期間を必要とした。

まず、調査期間では、組織的な大学院教育改革推進プログラム（大学院 GP）平成 22 年度、23 年度における 2 年間の事業のなかで、美術史的時代背景と文化財保存科学的知見をもとに修理方

針を決めるための検討を行った。事業内容は次の通りである。

平成 22 年 7 月 8 日、第 1 回（岡山県立美術館副館長、現吉備国際大学文化財学部長）守安收教授による作品についての歴史的考察を行なった。栄西の修理過程においても守安教授に美術史的考察の知見から助言を頂き修理工程を遂行していった。

平成 22 年 9 月 21 日、第 2 回 教育研究会において本学の分析科学担当教員（下山教授・高木准教授・大下准教授）による作品の科学調査を行った 。

平成 23 年 1 月 11 日、第 3 回 教育研究会では第 2 回の分析測定結果に基づいてディスカッションを行った。分析科学調査の詳細については、文化財情報学研究第 8 号に掲載される。

平成 23 年 2 月 25 日、第 4 回 （前林原美術館館長、現静岡文化芸術大学学長）熊倉功夫氏による作品の歴史的考察を行った。詳細については、文化財情報学研究第 9 号の講義要旨にも述べられているが、修理方針を見極める過程においても重要な事柄となるため以下講義要旨を参考引用し賛の内容について述べる。ちなみに賛とは画に題して画に添え書かれた詩文で、仏徳などをほめたたえる内容を記したものである。

像の顔が鑑賞者から向って左側を向いていると左が上（かみ）、右が下（しも）になる。逆に右のほうを向いていると、右のほうが上になる。普通我々は日本語を縦書きにするとき右から字を書いていくが、栄西画像は左を向いているので本図においては、左が上になり字は左から読んでいくことになる。

「法中之英　僧中之傑」；仏教の訪問の中で非常に優れた人である。また僧の中でも傑物だという褒め言葉。／「一錫浮滄溟　南詢還」；青くて暗い滄溟の海に一錫（錫杖のこと。自分の修行の身）を浮かべる。中国に向かって船で渡って行ったことを指しており、大海を渡って法を求めた。「南詢」というのは善財童子という仏教の人が南の方の様々な人に問うて歩いたという話があり、訪問して修行をする、あちこちをめぐって、南のほうへめぐって、法を求めて修行したということ。／「北謁　帰来三処開山」；「南詢」に対して「北謁」であり、南に法を求め行くと同時に北のほうへ行って祖師に出会って法を問うたということ。「三処」というのは三つのところを意味しており、ひとつは博多の聖福寺、二つ目は鎌倉の寿福寺、三つ目は京都の建仁寺の三つの寺である。中国から帰国してから開山した三つのところを意味する。／「法雨雷施電掣　形留」；大雨が降り注いて稲妻が走って雷鳴がとどろき目を開けることもできない。そのくらい激しく仏の教えというものを伝えてくれた優れた人物である。／「千載花上之春　道播　両国水中之月」；「両国」とは中国と日本のこと、水中の月というのは水に映った月、禅の言葉に、没縦跡（もっしょうせき）という言葉があるが、足跡を残さない、姿を見せてもあとに何も残さないというのは禅では非常に大事なことである。雲水というのは行雲流水。行く雲というのは確かに流れていくがあとには何も残さない。水もそうで、水は流れていくのだが水の跡というのはない。流れる水のごとく、跡を残さない意である。行く雲のように跡を全く残さない。没縦跡のような人間のあり方が禅では最も大事だという。そういう栄西禅師の境地を言っている。／「建仁開山千光禅師頂相」；

千光禅師頂相とは栄西禅師のこと。／「謹書」；謹書とは謹んで書(しる)す。何を書したかというと、／「仏光国師所讃之語」；仏光国師所讃之語を謹んで書すということである。栄西禅師が亡くなるのが 1215 年で、1141 年から 1215 年が栄西の生きた時代。無学祖元（仏光国師）が 1226 年から 1286 年まで生きた。この仏光国師の何かに書いたのでしょう。今は伝わっていないが、栄西禅師が亡くなってしばらくして、もっと前から頂相はいくつも描かれていたと思われるが今は残っていない。少なくとも無学和尚の時代に頂相はあって、それに賛をした。それがこの言葉。それを今度は絶海中津（1336 年－1405 年）が今の賛を書いている。1141 年から 1215 年に栄西禅師自身が生きた時代。それを亡くなってから無学和尚（1226 年－1286 年）がこれに賛をした言葉。『仏光国師語録』全 10 巻をざっと見たがこれは見つからなかった。語録のなかに残されていない言葉はたくさんあるが、たまたま残っていないのかもしれないが、この仏光国師がこういう賛、文章を書いた。それを 1336 年から 1405、もう室町時代だが、絶海中津賛というお坊さんが賛の語をここで改めて頂相に書いた、ということだろう。／「以塞仲首座之請」；はどういう人かわからないが塞仲というお坊さんが絶海中津〈のところ〉に頂相を持って行き、この絵に一つ賛を書いてくださいと頼んだ。絶海中津がその請いに応えて書いた。／「鹿苑比丘中津九拝書」；鹿苑というのは鹿苑院。今の金閣寺に絶海中津が従事した時期が２回あったので、どの時期かはわからないが、いずれにしても晩年、1380 年代か 1400 年代の初め、この時期に絶海中津が鹿苑にいたときにこれを書いたということだろう。これは栄西が亡くなってから 100 何十年、200 年近く後に作られている。そうすると画像、絵が果たしてどこまで栄西自身の実像を描いているのか、ということがわからない。あのお顔を拝見しますと、非常に特徴がある。つまり頭の格好が独特。これはやはり意味があるのだろう。リアルな姿ではないだろうかと思う。亡くなってからああいうふうな画像としてまとまっている。栄西という人を見てみますとなくなってからかなり経って、姿がのちの人々によって作り上げられてきた部分がかなりあると私は思っている。

※文化財情報学研究第 9 号，p 29,30,31. 参考引用

修理期間においては、

平成23年2月15～17日 、海外招聘科目「特別研究Ⅰ・Ⅱ」において、東洋美術修復研究分野に伴う招聘授業を実施した。大場武光氏（前メトロポリタン美術館　東洋美術修復室　室長）による作品の保存修理処置について学ぶ過程のなかで「明庵栄西像・絶海中津賛」についての修理方針にかかわる検討会を行った。

さらに平成23年11月12日（土）・13日（日）、岡山県高梁市において、裏千家「東中国地区地域交流大会2011inたかはし」（主管：備北支部）が開催され、家元特別講演が順正学園体育館において『満足八分目』と題して講演された際、ご多忙のなか坐忘斎宗匠が13号館文化財総合研究センター東洋美術修復室にて、僧明庵栄西画像 をご覧になり、やはり賛の詩文について二重に見える墨書について、筆の筆圧となるトメとハネ、筆のはらいについての違和感を述べられた。

以上のことから、特に賛の二重になっている墨書については、詩文の内容と美術史的考察を踏

まえ修理を行った。

そして修理を終え、平成25年3月25日（月）、吉備国際大学キャンパス内の茶室にて、学内関係者を集め特別内覧会を催し、修理前調査、修理処置に至る経緯と結果について報告を行った。また、修理された作品は、平成25年4月19日～5月19日の期間、岡山県立博物館で栄西禅師八〇〇回忌記念事業平成二五年度特別展「栄西」にて公開された。

２．概要および修理前の状態

本図が僧明庵栄西画像として現存最古の貴重な作品である。上部には、仏光国師（1226年－1286年）の賛を引用して相国寺の絶海中津（1336年‐1405年）が着賛している。

作品の現状を調査し記録していく過程において、修理仕様を検討するうえで重要な情報を得ることができた。

まず一つは、画面全体に巻折れや絵具の剥離・剥落の進行が著しいことである。

二つ目は、過去の修理における損傷を受けていることである。肌裏に移った顔料や墨書と本紙に描かれている描写が異なっているため画面全体が二重にみえる。特に賛の部分に顕著である二重の墨書については、賛の詩文である文字をよく観察してみると、肌裏に残る墨書と本紙に書かれる筆跡、筆圧であるハネやトメの筆線に、微妙な違和感を生じていること、文字が二重になっていることで鑑賞を妨げる要因となっている。また、熊倉氏による賛の詩文の解説の中で「『一錫浮滄溟』の『滄』のはらいが実に鮮やかであり、絶海中津という人はいつも右のはらいが非常に綺麗である。賛は非常に謹厳実直（つつしみ深く厳格なこと）に書いている。他の書に比べるとかたすぎるくらいである。こういうところに絶海中津の特徴、スタイルが伺える。」と語られていることから、文字から浮かび上がる人柄も損なわないよう大切に保存修理する必要があると考えた。

三つ目は、肌裏紙に残る紙シワが何箇所か確認でき、これは肌裏紙を打つ際に和紙の伸縮範囲、特に伸びの許容範囲を超え、縮む余裕がなくなったか、あるいは紙と糊加減としわを伸ばし逃がす手段を失い肌裏紙と本紙の間にズレが生じたものと考察することができる。

四つ目は、絹の欠損部分に直接補彩をしているというよりは、むしろ肌裏紙に直接彩色されている状態である。肌裏紙をすべて取り除いてしまうと彩色された痕跡は消え像の全容がつかめなくなる恐れがある。

以上のことから、現在に至るまでに何度かの表装替えまたは対症修理が行われており、その都度様相を変えながら現状を保っている状況が確認できる。

３．修理仕様

①修理前調査・記録

・修復前に写真撮影及び寸法、損傷等の調査を行う。

・修復前の損傷状態を写真撮影（一眼レフデジタルカメラ撮影,紫外線撮影,射光撮影,透過撮影）及び科学的調査（蛍光Ｘ線分析観察,赤外線照射観察）を行う。

・各絵具層の状態については、実体顕微鏡（マイクロスコープ）を使用し撮影記録を撮り、損傷状況を確認する。
・修理者は修理仕様について、美術史的考察と文化財保存科学的調査を基に修理方針を立てる。

②本紙の修理処置

・経年の汚れを除去する。
・剥落止めを行う。絵具の剥離箇所や膠が劣化している箇所には膠水溶液を塗布して絵具を定着させる。
・画面の保護のため表打ち工法を用いて本紙の修理処置を施工する。
・表打ちの後、乾式肌上げ工法で旧肌裏紙を除去する。
・本紙裏面の調査を行う。裏彩色が認められる場合は、美術史的考察及び必要に応じて科学的調査を行う。
・本紙、欠損部分には人工劣化絹を施す。
・肌裏打ちを行う。
・表打ち紙の除去を行う。
・補絹を施した部分にのみ、周りの色調に合わせた最低限の補彩を行う。

③表装裂地の新調

・表装裂地を新調する。
・形式：仏仕立て 表補表装（真の行）
・一文字：紺地一重蔓牡丹宝尽文金襴(大黒屋金襴)
・中　縁：萌木地二重蔓牡丹唐草金襴
・総　縁：白茶地霊芝文金襴(徹翁金襴)

④本紙と表装裂

・本紙は、肌裏紙、増裏紙、を打つ。折れ伏せを施す。
・表装裂地は、肌裏紙、増裏紙を打つ。
・本紙と表装裂の切り継ぎ（つけ回し）後、中裏紙、総裏紙を打つ。
・仮張り後、返し張りを行い、十分乾燥させる。

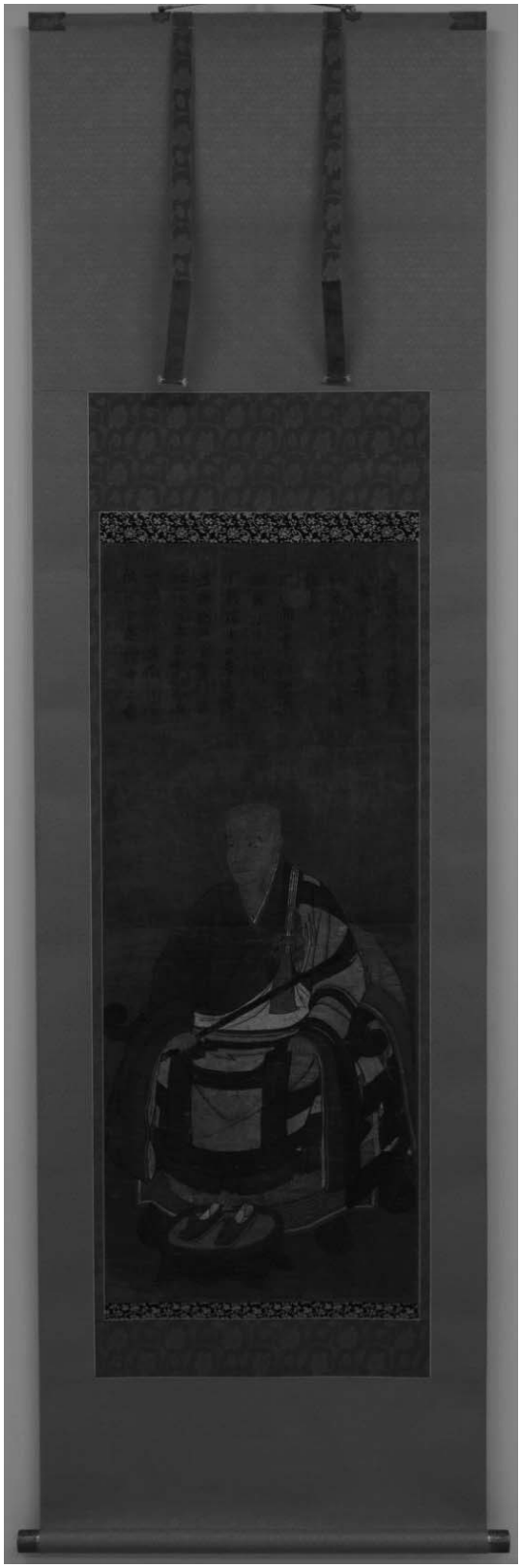
⑤仕上げ

・十分に乾燥させた後、軸首、軸木、八双、掛緒、鐶を取り付け仕上げる。

⑥保存箱

・掛軸を桐製太巻添軸に巻き印籠箱に収める。新旧の箱を台指箱に収め、二重箱とする。

修理前



修理後

本紙　修理前

本紙　修理後

品　質　絹本著色

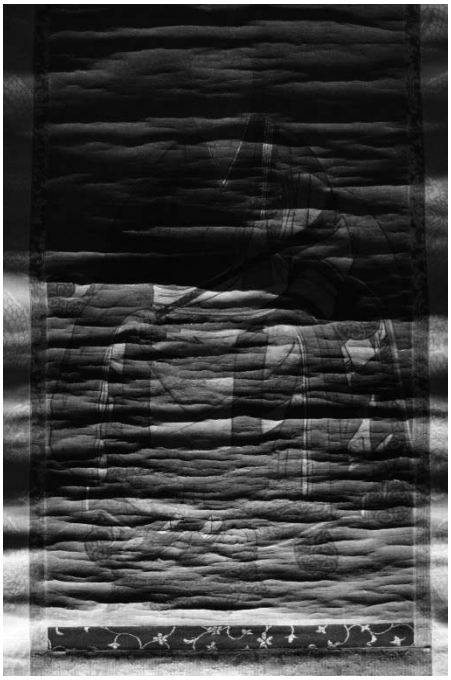
法　量　修理前　本紙　93.3cm × 38.5cm

　　修理後　本紙　93.3cm × 38.5cm

付属品　太巻添軸、二重箱

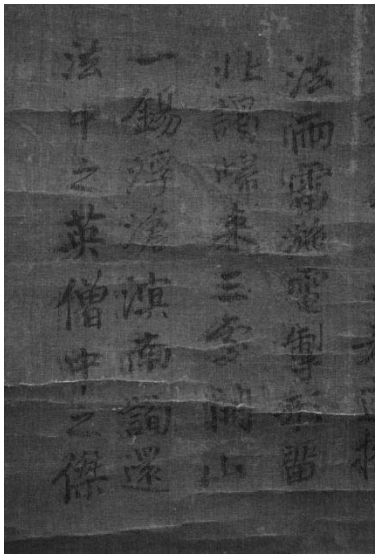
①修理前調査・記録

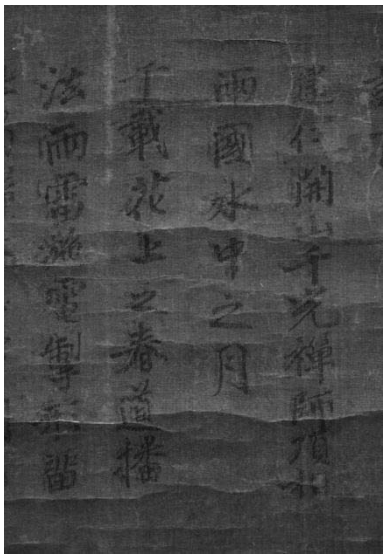
紫外線撮影

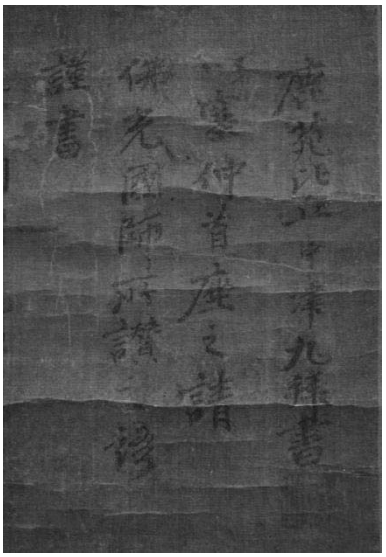


斜光撮影

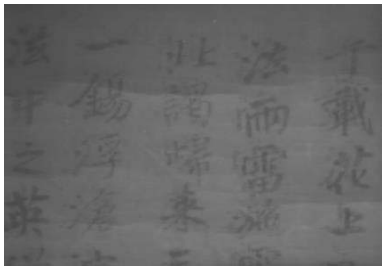
透過撮影

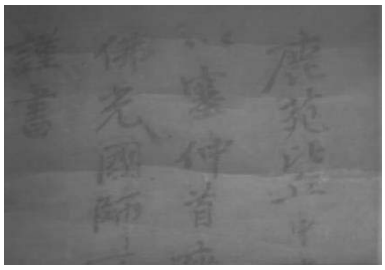






一眼レフデジタルカメラ



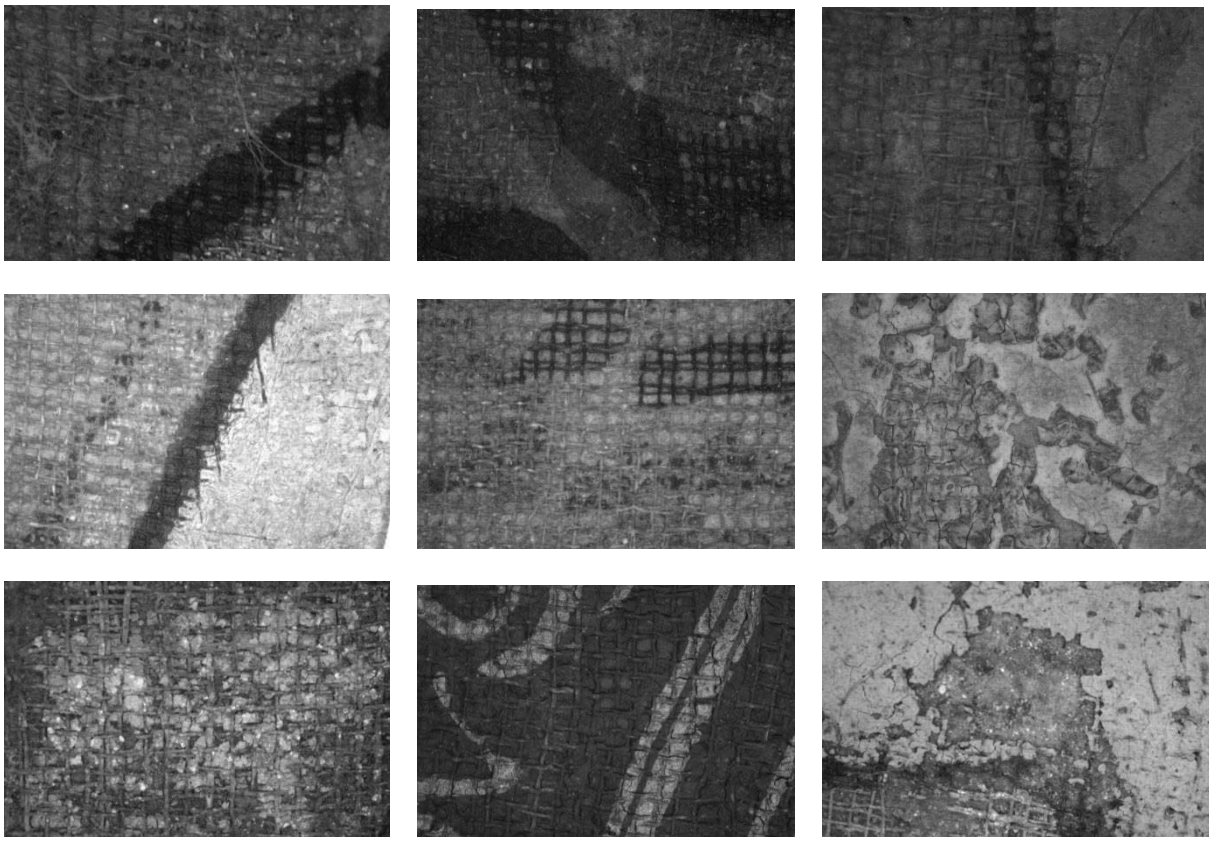


赤外線照射観察

向かって左肩

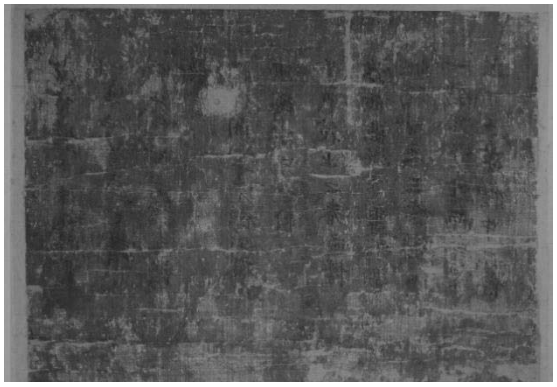
向かって右肩

頭部欠損

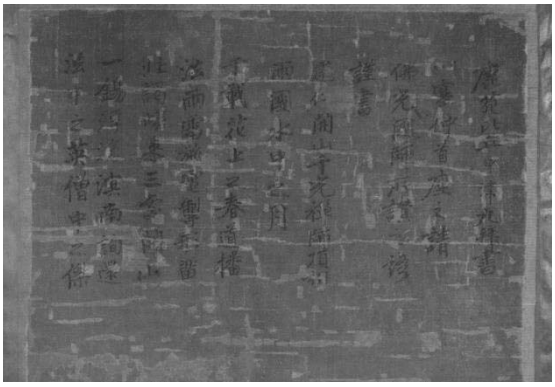

実体顕微鏡（マイクロスコープ）

赤外線照射観察

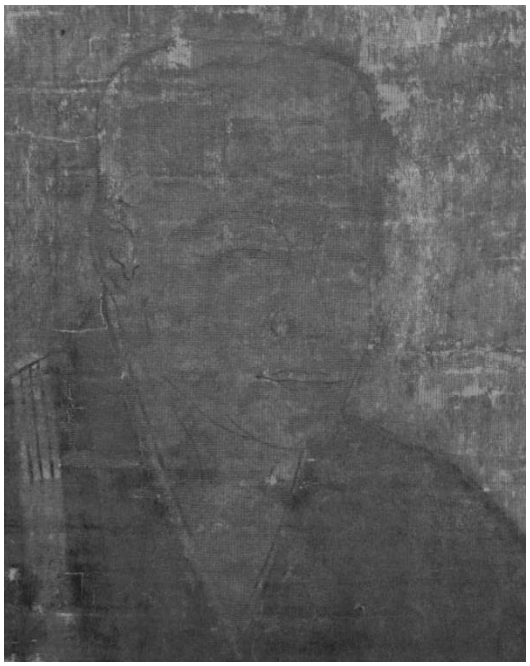
②本紙の修理処置



裏側_賛



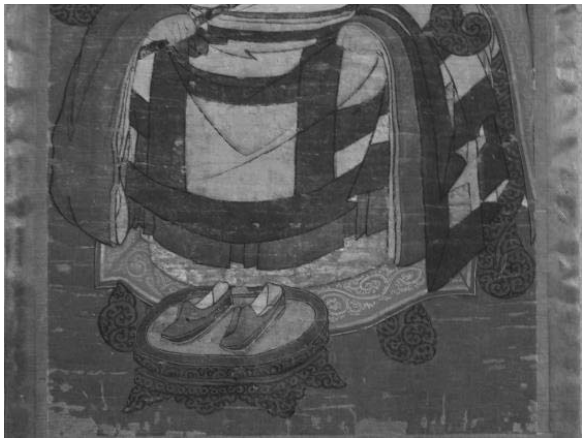
表側_賛



裏側_顔

表側_顔

裏側_衣、袈裟



表側_衣、袈裟

４．修理で得られた新たな知見

明庵栄西像・絶海中津賛の修理にあたり、特に賛の部分に認められる二重の墨書について、賛の詩文である文字をよく観察してみると、肌裏紙に残る墨跡（すみあと）と絹本に画かれる墨書の筆圧やハネやトメの筆線が微妙に一致しない箇所があった。これらについて、オリジナルであるのか、後書きされたものなのか、写真撮影と分析調査（一眼レフデジタルカメラ撮影，赤外線照射観察，透過撮影 etc）から観察を行った。それらを基に、美術史的背景を踏まえ考察を行ったが、結論としては、どちらも受け継がれてきた痕跡であるため、現状を尊重しながら修理に着手した。

絵具層の状態については、実体顕微鏡（マイクロスコープ）を使用し撮影記録を撮り、損傷状況を確認したが、かなりの彩色が肌裏紙に施されていることがわかった。肌裏紙に残る紙シワと絹本の欠損箇所の肌裏紙には、たっぷりと彩色が施されておりこれらを通常の修理方法で修理すれば、画面の全容が消えてしまう恐れがあったので、肌裏紙を最大限取り除き、最大限生かす修理を行った。以上のことから、現在に至るまでに何度かの表装替えまたは対症修理が行われており、その都度様相を変えながら現状を保っていたことが分かった。

調査にかかった期間　2 年間（2010・11）
修理にかかった期間　2 年間（2012・13）

謝辞

平成 26 年は栄西 800 回忌にあたることから生地である岡山で修理に携わることができたことは、わたくしにとっても大きな事でした。また、ひとつの作品について、美術史的視点、時代背景からの考察、必要に応じて文化財保存科学調査を行い、それに基づいて修復家が作品に携わるという、三位一体型の修理が行えたことに心から感謝いたします。本作品「明庵栄西像・絶海中津賛」の修理処置を行うにあたり、美術史的な視点からお力添えを頂いた守安收先生、東洋美術保存修理の立場からお力添えを頂いた馬場秀雄先生、文化財保存科学調査にあたり赤外線照射撮影にご協力頂いた高木秀明先生、文化財保存科学と芸術的考察からお力添えを頂いた鈴木英治先生に心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

１．建仁寺 高台寺・圓徳院・備中足守藩主木下家の名宝とともに 岡山県立美術館図録/p149,166 2009 年
２．文化財情報学研究第 8 号 /p101. 2011 年
３．文化財情報学研究第 9 号 /p29,30,31. 2012 年